

1 学校教育目標 夢と誇りをもち、自己実現を目指す生徒の育成 学校スローガン:みぎき、ささえ、つながる 生徒スローガン:みんなでめざそう NAT! (N=日本一 A=アクティブな T=中学校)	2 本年度の重点目標 ①『活用力』を高める指導方法の研究と実践 ～効果的な言語活動を取り入れ、「学び合い」を重視した授業実践を通して～ ② 人権教育を中核に据えた教育活動の実践 ～「仲間づくり」「環境づくり」の実践と「特別支援教育等」の充実を通して～ ③ 「地域とともにある学校づくり」の推進 ～地域貢献活動(NATプロジェクト等)を通して～
---	--

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 『活用力』を高める指導方法の研究と実践 ～効果的な言語活動を取り入れ、「学び合い」を重視した授業実践を通して～

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	NAT(西中)型授業の実践	◇言語活動を通じた学び合いを取り入れることにより育てたい力を伸ばす。	◇授業研究会の中で、言語活動を通じた学び合いを取り入れることにより、生徒が『活用力』力を身につけることができるかを確認する。	B	◎授業の中で、説明したり、教えあったりして自分の考えを述べる機会を増やすことにより、「内容の質」が高まってきた。 ▼「活用力」については、向上している生徒が多いが、全体的な学力としてはもっと工夫する必要性を感じる。	◎授業では、学び合いを通して思考が深まり、知識として理解していても、それが定着するよう、家庭学習、復習のさらなる習慣化が必要である。
		全職員による研究授業の実践	◇言語活動を通じた学び合いを意識した研究授業を全職員で行う。	◇言語活動構想シートを活用し、各研究部会で事前に研究会を行う。 ◇研究授業の前に、指導案検討会等を行い、よりよい授業づくりを目指す。	A	◎全職員が道徳的価値観・活用力をふまえて、学び合いを意識した研究授業を行うことができた。 ◎研究授業後の事後研修ですべての研究授業の効果的だった点、もう工夫必要だった点についての確認ができ、その後の授業に活用することができた。	◎今後とも研究授業を研究テーマだけでなく、活用力もふまえた、計画・立案をしなければならぬ。 ◎指導案の更なる改善と授業後の反省改善を行っていく。
		基本的学習習慣と学習規律の向上	◇家庭学習時間に2時間以上取り組む生徒の割合を70%以上にする。	◇月1回程度の家庭学習時間調査達成度調査を行う。 ◇「家庭学習ルール」を改訂し、活用方法を検討して用いる。 ◇「はなまる連絡帳」を活用し、保護者との連携を図る。	B	◎家庭学習の充実のためのアンケートや学習時間調査などを実施し、生徒の実態把握ができた。テスト対策学習計画を利用し、学習に取り組むこともできた。 ▼家庭学習時間2時間以上に取り組む生徒の割合70%は達成できなかった。 ▼忘れ物をしたり提出物の期限を守れなかったりする生徒がおり、こまめに提出を促す声かけが必要であった。	◎家庭学習アンケート、学習時間調査等は継続して実施し、集計分析結果を学活や道徳の授業で活用するなど、生徒や保護者に対する発信をしながら家庭との連携を図る。 ◎全学年2時間の学習目標時間を浸透させるため、学級での生徒に対する指導だけでなく、保護者にも周知をはかる。 ◎家庭学習時間とネットやゲームなどのメディア時間との関係进行分析する。
		学力・学習状況調査結果の分析と有効活用	◇県調査・全国調査において県平均を上回る。	◇『活用力』を高める授業を推進する。 ◇学習習慣の定着を図る取り組みを継続的に行う。 ◇「仲間の約束」を生かし話し合いの場を取り入れた授業を行う。	B	◎国語(2年)・社会・数学(2年)・理科(1年)において、「活用力」に関する問題の正答率が高く、国語に関しては4月調査の課題が改善されている。 ◎数学(1年)において、数量を文字を使って表すこと等技能面の正答率が非常に高く、4月調査の課題も改善されている。 ▼英語の「書くこと」、数学(2年)や社会(1・2年)、理科(2年)等の基礎的・基本的な内容の正答率が県平均より低かった。	◎前年度12月調査の分析結果を再度共通理解し、具体的な改善策を確認する。 ◎2分前学習を内容を含めて改善しながら、継続して行い、基礎的・基本的内容の定着を図る。 ◎授業や宿題等で活用力の問題を継続して取り上げ、指標を達成できるような授業改善に取り組む。 ◎「主体的・対話的で深い学び合い」を実践するため、学習規律の遵守の徹底を図る。
		教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	◇ICTに関する職員研修を必要に応じて実施する。 ◇全教科においてICTを活用した授業を場面に応じて適宜、実施する。	◇ICT活用に必要な環境を整える。(システム管理の徹底) ◇ICT教育支援員を積極的に活用する。	A	◎ほとんどの教員が電子黒板の利用の仕方を理解し、授業実践をしている。 ▼クロムブックの授業実践は、総合的な学習の時間や学級活動・国語・英語・技術・家庭など特定の教科の使用にとどまっている。	◎導入されたクロムブックの授業実践については、今後利用方法の研修を実施していく必要がある。

② 人権教育を中核に据えた教育活動の実践 ～「仲間づくり」「環境づくり」の実践と「特別支援教育等」の充実を通して～

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	学年・学級活動の充実	◇「仲間の約束」の全項目について「守れている」「まあまあ守れている」生徒の割合を90%以上にする。	◇自分の思いを伝えあう場を工夫した授業を行う。 ◇Q-Uテストを活用し、学級の生徒理解に努め、生徒各々の自己理解を促す。	B	◎「仲間の約束」を意識させるような手立てを盛り込んだ授業が増えた。「意識できていない」生徒は減った。 ▼第2回Q-Uテストの分析から活用への取り組みが、第1回テストほどできなかった。	◎「仲間の約束」を意識させる授業を継続する。 ◎節目ごとに「仲間の約束」について、学校全体で共通理解を図る。 ◎各回のQ-Uテストの分析に力を入れる。 ◎「ふわふわ言葉」の授業回数を増やす。
		人権同和教育の充実	◇「ふわふわ言葉」を心がけている生徒を70%以上にする。	◇総務部の活動でアンケート等を実施し、意識を高める。 ◇技術科や道徳学活で情報モラルの授業の充実によって推進する。	B	◎平和集会や人権週間の取り組みを行うことができた。 ▼「ふわふわ言葉」を心掛けた学校生活を送ることができた生徒は9割であったが、何気ない言葉で友達を傷つける場面が見られた。 ▼人権・同和教育、特に部落問題学習をもっと組織的に取り組む体制を再構築しなければならない。	◎取り組み後の事後指導に力を入れ、生徒の理解度を確認する。 ◎「ふわふわ言葉」についての道徳指導の強化する。 ◎部落問題学習についての職員研修の実施と指導案作成及び授業参観を全職員で行う。
		特別支援教育の充実	◇支援を要するすべての生徒について個別に支援計画を作成し、それを活用する。	◇アンケートや教育相談による情報の収集を行う。 ◇特別支援教育委員会を適宜開催し、学校全体での支援体制を構築する。	B	◎支援を要する生徒の理解と対応については、前年度からの引継ぎをもとに、年度の早い段階で個別の支援計画を作成し、共通理解のもと意図的計画的に行えるようになった。 ◎支援員の活用により、特に中1での学習支援が充実し、要支援生徒に必要な手立てを講じることができた。 ▼個別の支援計画の作成が計画的にできず、活用が十分でなかった。 ▼ユニバーサルデザインや合理的配慮の視点で、教室環境や必要な個別支援を検討する必要がある。	◎要支援生徒の指導目標や指導・支援内容については、前年度からの引継ぎをもとに、年度の早い段階で個別の支援計画を作成し、共通理解のもと意図的計画的に行えるようになる。 ◎教室環境など、要支援生徒が集中して授業に参加できるように整備し、全校で取り組んでいく。 ◎支援が必要な生徒については、さらに積極的に保護者と本人と相談しながら支援内容を提案していく。
	●いじめの問題への対応	情報モラル教育の実践	◇情報モラル教室を実施する。 ◇各教科の授業で情報モラルの視点を持った授業を行う。	◇スマートフォンやPCの使い方、その他情報機器を利用する際の危険性など具体的な事例をあげた内容にする。 ◇技術科や道徳学活で情報モラルの授業を行うだけでなく、各教科においても情報モラルに配慮した授業を行い、生徒の模範となる。	B	◎全校集会でネットの使い方について、スライドを用いて学習する機会を持った。 ▼生徒のTwitter利用が増加しており、学校名がわかる形でのアップによる生徒指導をすることがあった。	◎技術・家庭科の授業の他に、道徳や学活などでもSNSの使い方について、継続した指導が必要だと思われる。
		生徒会による「いじめ追放」の意識向上	◇クラスにいると「安心できる」「楽しい」と思える生徒の割合を80%以上にする。	◇生徒会が中心となり集会などの時間に「仲良し宣言」を言う。 ◇学校行事等の中において、クラスでの協力が実感できる内容を取り入れる。	B	◎生徒会活動では「仲間の約束」を意識する活動ができた。 ▼学校・クラスが「安心できる」と答えた生徒は88%であるが、日常的な友人間トラブルも発生している。今後も引き続き注視する必要がある。	◎いじめ追放のために生徒自身が積極的に取り組めるように、生徒会を中心に「仲間の約束」や「なかよし宣言」を意識した活動を行う。
		部活動の充実	◇社会体育を含めた部活動参加率を95%以上にし、充実した部活動の運営を行う。	◇顧問・外部指導者・保護者との連携を密にし、生徒個々に応じたきめ細やかな指導を図る。	A	◎社会体育を含めた部活動参加率は、98%であった。 ◎部活動に意欲的に取り組み、生徒9割、保護者8割が満足している。	◎生徒が練習メニューを考え、主体的に取り組めるような手立ての工夫が必要である。 ◎部活動顧問の指導内容の量から質への転換を図る。 ◎部活動休養日の徹底を図る。
		食育の推進	◇学校・家庭・地域の連携を深め、給食を通じた食に関する指導を充実させ、食の自己管理能力や望ましい食習慣を身につけさせる。 ◇朝食を毎日食べて登校する生徒の割合を88%にする。	◇地産地消の食材を多く活用した「ふるさと食の日」を実施し、郷土を愛する心の育成につなげる。 ◇栄養教諭と学級担任による、効果的な朝食指導を行い、家庭への啓発を強化し、朝食に対する意識向上を図る。	B	◎各学年において計画的な食に関する指導ができた。 ▼朝食喫食率は、1年生が90%、2年生が87%、3年生が83%と学年が上がるに伴い喫食率が低下している。 ◎「ふるさと食の日」など年間計画に沿って食育を推進することができた。 ◎給食の残食がほとんど0であった。 ◎食物アレルギー対策についても家庭との連携をしっかりと行い問題なく実施することができた。	◎家庭の食に関する意識向上のために、より多くの保護者の教育活動の参加をよびかけていく。(給食試食会、献立委員会、献立募集など) ◎継続した食に関する指導を行うことで、望ましい食習慣の形成につなげていく。
	●健康・体づくり	「自立登校」の奨励と実践	◇「自立登校」について理解し、実践できる生徒を80%以上にする。	◇「自立登校」を実践する意義について情報発信し、基本的な生活習慣の確立を進める。 ◇常に先を見通した行動を推進し、自分で判断して行動できる生徒の育成を図る。	B	◎生徒自身や保護者の自立登校の評価は非常に高い。 ▼教師の働きかけに不十分さを感じることもある。	◎集会や帰りの会などで、自力登校の呼びかけやよく出来ている生徒たちをほめるなど評価をする取り組みが必要である。
		生徒会活動・学校行事の活性化	◇学級生徒会・専門部委員会・代表委員会を完全実施する。	◇生徒会活動への積極的な参加を生徒・職員に働きかける。	A	◎ボランティア活動を中心に活発な活動がなされ、特に生徒会役員の成長を促すことができた。 ◎今年度のボランティアでは、生徒会役員だけでなく多くの生徒が参加できた。	◎各委員会の自主的な活動案を積極的に実現させていく。

	<p>●志を高める教育</p>	<p>自己実現を育む生徒指導</p>	<p>◇「なりたい自分」をイメージできる生徒の割合を70%以上にする。</p>	<p>◇キャリアプラン作成を推進し、「なりたい自分」に向けて努力する姿勢を育てる。 ◇「学ぶこと」の意義について理解を深め、学力向上につなげる。</p>	<p>B</p>	<p>◎1年生はライオンズクラブによるマナー検定、2年生は職場体験学習、3年生は進路学習によって、自分の将来について学び考える活動ができた。 ◎全校集会において、学習・進路について講話ができ、生徒の意識向上に努めた。 ▼各教科や学級活動など、全ての教育活動の中でキャリア教育を仕組んでいくことが必要である。</p>	<p>○1年生のマナー検定を、基礎の「礼儀・作法読本」から作り上げる。 ○2年職場体験学習の運営に、町の農林課や商工観光課に関わってもらう。 ○3年生の進路学習に、保護者の経験やアドバイスも生かす工夫をする。 ○各教科の授業の中でも、学習が自分たちの将来に関わっている、有効である、と示していくことが必要である。</p>
--	-----------------	--------------------	---	--	----------	---	--

③ 「地域とともにある学校づくり」の推進 ～地域貢献活動(NATプロジェクト等)を通して～

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	開かれた学校づくりの推進 家庭や地域との連携	◇地域人材を活用した授業や行事を年1回以上実施する。 ◇情報公開を推進する。	◇地域人材を生かした授業の実践を、地域の有識者と連携しながら実施する。(道徳・学活・総合・進路指導等) ◇学校HPや配信メールにより常に新しい情報を豊富に提供する。 ◇学校だよりや学級だよりの定期的な発行を推進する。	B	◎「はなまる連絡帳」を利用し、情報をタイムリーに発信することができた。 ◎地域人材を生かした学校行事が定着した。(地元ライオンズクラブによるマナー検定・給食による地産地消・郷土料理教室など) ▼授業参観や学年PTAなどへの参加者が少なく、学校の様子を伝えられずにいる。	○学校ホームページにおいて、発信担当者を決めて、定期的な発信を継続する。 ○管理職が中心となり、地区の各種団体とのコンタクトを積極的に取り、学校での行事への協力依頼を行っていく。
	○教職員の資質向上	教職員の指導力向上と服務規律遵守のための研修実施	◇研修会等への参加の推進を行う。 ◇校内研の推進により、学習指導力を向上させる。 ◇信用失墜行為の防止に関連した職員研修を充実させる。年2回以上実施する。	◇研修会や講座の情報発信を職員に積極的にいき、参加できるように校内の調整を行う。 ◇教職員1人年1回以上、研究授業を実施する。 ◇ハラスメント・飲酒運転などを防止するための研修会を実施する。	B	◎教職員1人年1回以上の研究授業を実施することができ、校内研究を充実させることができた。 ◎校内研修(人権・同和教育・特別支援教育・道徳など)計画的に実施することができた。 ▼教科指導の研修への参加が増えてきたが、学級経営等の研修への参加を助めていき、学級経営力を身に付けてけることができるようにする。	○研究主任を中心として、従来までの授業研究会及び校内研修の継続し、改善を進めていく。 ○研修会や講座の案内を「NEO」(校内情報ネットワーク)を使い、職員に確実に伝えるようにする。 ○服務については機会を捉えて職員への指導を継続するとともに、職員からもヒヤリ・ハット体験を通してお互いに服務規律の意識を高めていく。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	衛生管理の改善・充実 文書処理の校務サーバーの利用	◇「職員会議等の回数や時間が適切であり、円滑な運営ができて」と答える職員を90%以上にする。 ◇「早時退勤日に、17:30までに退勤できた」と答える職員を70%以上にする。 ◇「分掌の文書等を校務サーバーに保存し、活用することができた」と答える職員を90%にする。	◇全職員による職員会議の前に、事前に打ち合わせを行い、円滑な運営ができるようにする。 ◇毎週水曜日に部活動完全下校を16:30に設定し、早時退勤ができるような環境を整える。 ◇文書等の円滑な作成ができるように、校務サーバーへの文書の保管・利用の方法を再確認する。	B	◎職員会議の運営が円滑であると回答した職員は90%を上回り、円滑な運営ができていたと言える。 ▼早時退勤日には、17:30分前に退勤できたとしている職員は60%であり、昨年度を下回った。 ▼文書等のデータの活用・保管に活用できている職員が80%、職員が多く入れ替わったため昨年度を下回ったのではない。	○職員会議の運営、校務サーバーの利用は今年度の継続を図っていきたい。 ○早時退勤日については、更に意識の向上を図り、仕事の効率化等をすすめ、早時退勤ができるような環境を整え、その他の日にも早く帰る雰囲気を作りたい。 ○文書等のデータの活用方法を誰にでもわかりやすくマニュアル化する必要がある。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

- 研究授業の実践、ICT活用、食育、文書作成におけるサーバーの活用については、充実した取り組みができています。また、本年度から評価に加えた働き方改革については、定時退勤の推進など評価が得られているが、時間外勤務の総時間が長くなっている職員が2割おり、更なる業務改善、意識改革が必要であると考えます。
- 全体的に生徒による評価が高くなっている。このことは、生徒たちが学校生活において、それぞれの活動に充実し、自己肯定感が高まっているためではないかと推察できる。一方、職員による評価は、前年度より厳しい評価となっており、目標を高いレベルに設定し指導にあたっているとと思われる。
- 部活動の充実においては、生徒保護者ともに高い評価が出ている。今後は適切な部活動休養日の設定、主体的な生徒による部活動のあり方を模索していく必要がある。
- 授業参観や学年PTA・PTA総会等への参加が著しく少ない。来年度は、PTA活動を通して参加意識が高まるような取組をしていく必要があると考える。

●は共通評価項目、○は独自評価項目